



## 今、社会的包摂（ソーシャル・インクルージョン） の大切さに気づくこと



理事長 川室 優

霜月を迎えると急に秋晴れの空から天候不順の空に変わり、心身共に体調を崩して医療機関を訪れる患者さんが増えます。月初めの頃は、多少は好天気も続きますが、中旬ともなれば、朝晩の気温も下がり、寒さを感じるようになります。

そうした月日の流れの中で、来年は新しい元号となり、2020年にはオリンピックを迎えます。それに伴い、経済は上向きになりつつあると言われますが、日々の生活から見ると、それほど明るいとは思えず、むしろ状況は、晩秋から冬に向かう気候に似ているような気がします。その一例としては、少子高齢化の影響による人材不足があげられます。人は汗することの尊さを忘れ、体を動かす仕事、即ち介護職に始まり、物づくり職（大工、左官など）、調理職などのマンパワーとして、外国人またはAIなどのロボット機器に頼ろうとする時代になりました。おそらく、今後さまざまな現場で、そのような状況に変化していくでしょう。本来ならば、人と人とが関わりながらコミュニケーションを取り、仕事をしていた場が、様変わりしようとしています。その過程で疎通不良が起こり、人間関係が希薄になるのは当然のことです。そうした社会の中では人間が疎外され、自己の本質や存在感が失われて孤独感が強まり、次第にこころの病を患い、生きがいを見失ってしまうことでしょう。

そのような世相を背景に当院では、毎年院内で「米づくり体験」を行い、体験した米づくりの回想を互いに共有し、感動を分かち合うことを目指しています。また、川室記念病院では、近くの田んぼで認知症の方々、障がいのあるの方々、地域の方々と「稲作ケア」を体験し、感動を共有するところ、助け合い・支え合うところなどを育む実践を続けています。そして、こうした共生社会づくりのための研究事業を、東京都立長寿医療センター岡村毅精神科医師・宇良千秋心理研究員並びに上越市の協力で行っています。この研究の最終目標は地域の共生社会づくりですが、社会包摂（ドルトムントソーシャル・インクルージョン）の形成でもあります。

日本でも、東日本大震災などを契機に「一人ひとりを包摂する社会」という理念が強調されるようになりました。定義は、「社会的に弱い立場にある人々をも含め、全ての人々に対して、排除や摩擦、孤独や孤立から援護し、健康で文化的な生活の実現につなげるよう、地域社会の一員として包み込み、支え合う」という考え方です。私共が地域に提供する医療福祉サービスは、その社会的包摂の理念である“支え合う社会”に貢献することであると強く念じて、職員一同にも、日々、そのことを思い返し、気づきを深めて頂きたいと願っています。そして、常にこころの病を患う方々に寄り添うことを忘れないようにしていきましょう。

## ● 若年性認知症家族教室について

認知症疾患医療センター長 森橋 恵子

みなさん、「認知症」というと高齢者の病気と思っていませんか。65歳未満でもなることがあります。若いのに「認知症」と言われたらどうでしょうか。どうしていいかわからず、不安になりますよね。そのような方の家族支援を目的に、認知症疾患医療センターでは平成21年から「若くして認知症になられた方の家族教室」で認知症のご本人、ご家族の支援を行っています。



厚生労働省によると、若年性認知症の方は全国で約4万人近くいると言われていています。認知症施策戦略「新オレンジプラン」においても、「認知症の人の意思が尊重され、住み慣れた地域でその人らしく暮らし続けることができる社会を！」と基本的な考え方が示され、若年性認知症の方への支援は柱の一つになっています。

若くに発症するため、本人や配偶者は現役世代、子どもは一人立ちしていない、家のローンがある…など経済的な負担も大きく、本人やご家族である配偶者や子どもは先々の不安を抱えます。また本人と親の介護が重なる場合もあり経済的にも精神的にも大きな負担が強いられます。そのため、この家族教室では、病気の理解、活用できる社会資源、家族自身のストレスマネジメントなどをテーマにしています。診断された当初、どうしていいかわからず、誰にも言えずに一人悩み、人に背中を押され、やっとの思いでこの教室に参加される方も多くいらっしゃいます。そして教室で同じ仲間に出会い、悩みや知恵等を共有し、制度やサービスを知ることで、家族自身が元気を取り戻し



ていきます。また、教室で出会ったご家族を通じて認知症のご本人の支援に繋がっています。そんなお手伝いをしています。

みなさんの知り合いで若年性認知症の方、ご家族がおいででしたら、「家族教室に参加してみたら」とぜひ声をかけてあげてください。その一言が一步前進につながるでしょう。また、当センターでは「若年性認知症支援コーディネーター」を配置し、ご本人の視点に立った支援を行っていますので、お気軽にご相談ください。

## ●敬老会について

ショートステイお堀ばた主任

羽深 大和

9月20日(木)ショートステイお堀ばたで敬老会を実施しました。当日は、ご利用者さんに対し、日頃の感謝の意味も込めて、職員の余興とカラオケを行いました。余興はショートステイでも1、2を争う余興好きの職員による二人羽織を行い、最初は化粧をし、その後にご飯を食べてもらいました。利用者は最初「何をやってるんだ？」みたいな表情をされていましたが、二人羽織だと段々と分かってくると笑顔も多くなり、中には手を叩いて喜んでいる利用者さんもありました。職員も汗だくになり熱演してくれて大変盛り上がりました。その後、皆でカラオケを行いました。中々1人で歌うのが恥ずかしかったり、照れたりされる利用者さんが多かったので、職員も含め全員で皆さんが知っている懐かしい曲や童謡等を歌い喜んでおられました。最後に、いつもより少し豪華にもらったおやつを食べて頂き終了しました。利用者さんからは「楽しかったよ」等の言葉を頂き職員にとっても有意義な時間を共有できた敬老会になりました。



## ●院内感染対策委員会

看護部長 高倉 小夜子

当委員会では、院内感染対策を全職員が理解し感染情報を共有して院内感染の危険及び発生に迅速に対応し、また、患者及び全職員、訪問者を感染から守り、安全で質の高い医療の提供ができることを目的としています。

院内感染防止のため、標準予防策を基本とし、アウトブレイク発生の際には、その原因の速やかな特定・制圧・収束に向け取り組んでいます。

また、マニュアルの整備・感染ニュース発行・全職員を対象とした研修会の開催(年2回以上)、環境ラウンド(年2回)、下部組織である感染対策小委員会(多職種からなる)による週1回の院内ラウンドを行い必要な感染対策の指示(効果的介入)を行うとともに問題点・対策等について検討を行ってきました(ラウンド結果についてはフィードバックし評価)。

今後も地域の感染情報を速やかに把握し常に新情報を提供できるよう心がけ、皆様と協力・連携し医療の安全に努めて生きたいと思っております。



## ●セクション紹介 外来診察室

私達外来のモットーは「笑顔で対応」です。外来スタッフ6名は、いつでも笑顔でやさしく声かけし、ゆとりある言葉づかいで一人ひとりの患者様と向き合って対応しています。また、限られた時間の中でも患者様が安心感を得られるよう医師・コメディカル等と常に連携し、情報共有を行い、患者様中心に考えてサポートしていくことが大切な私達の役割として日々の業務を行っています。

当外来では専門外来として『もの忘れ外来』『脳の健康外来』『発達外来』を行っています。一般外来も今年度から初診の方は完全予約制で診察を行っています。専門外来を受診された患者様からは、「病院に来たらすぐに対応してもらった」また、「初めて精神科の病院に入ってみたが、雰囲気も良くて、来て良かった」「職員の声かけで不安もとれ安心できた」とのお声を頂いています。

上越地域の基幹病院の玄関である外来を担当する者としての意識を高く持ち、患者様の心が不安定な時にこそ利用していただける医療機関としてスタッフ一同、努力していきたいと思っています。



## ●編集後記

### 広報情報編集委員会 委員



平成最後の1年、ついこの間まで「今年は猛暑」というニュースをみていた気がしますが、気付けばすっかり寒い冬を迎えました。今年はどんな年だったかな？と振り返ってみると、大雨、猛暑、地震、台風…と、自然災害の多かった年のように思います。

さて、来年はいよいよ新元号となります。平成生まれの私は元号が変わるという経験ははじめてで不思議な感じです。みなさんはどんな新元号を予想しますか？来年も良い年になりますように。

バックナンバーはホームページ（PC、スマホ）よりご覧いただけます。

<http://www.nishishiro-hp.or.jp/>

高田西城病院

検索

